広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本人の言語行動について ： その記述的研究
Author(s)	王, 宝山
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1989 : 61 - 68
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039264
Right	
Relation	

日本人の言語行動について
―その記述的研究―

王宝山

序章

私の日本での研究期間は一年である。勉学にはあまりにも短かいものであることは言うまでもない。従って この一年間は貴重なものになるわけである。限りのある期間内になるべく多くのことを勉強するのは私の最大の望みである。私は大学時代に日本言語文学を専攻していたが、日本に来たのは初めてである。日本での暮らしでは本場の日本語に接することを通して何となく今まで勉強してきた教科書の日本語と違うような気がした。この暮らしの中の生の日本語は日本で暮らさなければ接触できないものである。言葉と文法との関係においては、言葉は第一次的であり、文法は第二次的である。言い換えれば言葉があって始めて文法がある。よく考えてみれば人間がしゃべる言葉のうちには必ず一定した文化的な背景がある。その文化的背景を知ることが大切である。日本に来てまもなく私は暮らしの中の日本語の生くしさに興味を持つようになった。そして、その実例の収集に力を注いできた。そのうちに指導教官の沼本先生に自分の暮らしの中の話しことばに対する未熟な見方をお話ししたら先生は言葉の実際のままの状態についての研究が語学研究の第一歩であって言語の実態研究というものだ、と教えて下さった。それをきっかけに日本語の実態研究をめざしにすることにした。

外国人として日本語の実態を調べるのは日本人と違って外国人なりの見方が見つかると思う。その違いというものはその人の国(母国)の文化的な背景を参照して日本のそれと対比しながら見いだされるものである。比べてみた結果、共通する部分も認められるが相異する部分が目立つことになるわけである。この相違する部分は即ち「文化的な差異」である。この文化的な差異は激しい衝突を伴うものである。従って外国人学習者の頭の中に与えた印象が深いのも当然であろう。

一般的に言えば文化的な差異に支えられる言語現象には外国人学習者の語言勉学上の難点があるところでもある。

初めて日本へ研究に来たこと、また、たった一年間の期間の短かいこと、これらの客観的な条件のもとに日本語の実態研究を試みるのは一番いい選択であろうと思う。

言葉の実態研究は広範な分野であり、この短かいレポートではとても全般的には述べられない。沼本先生の指導に従ってその中の「言語行動」にしぼった。

さて、言語行動とは何であろう。「国語学研究事典」には「人間の諸行動中、言語による行動で言語活動、言語行為などともいう。言語行動は人間の言語現象を総括的にとらえたもので、全体としては多様であり、混質的であるという。いくつもの領域にまたがって物理的、生理的、かつ心的であり、それは個人的領域にも社会的領域にも属す

る。」（注⑪）とある。

さらに言語行動において口頭言語の研究がどういう現状であろうか。「学問の世界においても口頭言語は研究の対象に値しないものとして考えられる傾向が今なお強い。人間の生活が話しことばを抜きにしては考えられないという現実、またあらゆる研究や教育が書かれたことばによってのみでなく、話しことばによっても与えられているという社会的事実が存在するのにもかかわらずである」（注⑫）と、水谷修先生が言っている。きびしい批判である。

話しことばを積極的にとらえることの意義を認識されたい。「われわれが使用している話しことばが一体どんなものであるか。その実態を把握することから始めなければならないであろう。それは正しい話し方、きれいなことばといった規範色の濃い見方に立つものではなく、あくまでもその生態を冷静にみつめることから出発すべきではなかろうか」（注⑬）。

第一章　省略表現

第一節　言いきらない表現形式

日本語では書きことばよりも話しことばの方が言いきりでない文末表現が多く見られる。

例（1）〔電話で〕

A：もしもし、田中ですが　（a）

B：私が健二の友達で三原というものですけど、健二は　（b）

A：あ、今ちょっと出ているんですけど　（c）

B：あ、そうですか。

A：帰ったら、こちらから電話させてもらいます。

B：はい、お願いします。

A：あのう、お宅の電話番号の方は　（d）

B：はい、014－8679です。

A：はい、わかりました。どうもすみません。

B：いいえ、それでは。

（a）～（d）の部分は言いきらない表現形式である。文の構造から見れば不完全なものと思われるであろう。しかし、実際にそうなっているのである。

ところで、これらの不完全な文を「完全な文」にすればどうなるであろう。

（a）もしもし、田中ですが、そちらはどなたでしょうか。

（b）健二はいますか。

（c）今ちょっと出ているんですけど、どういうご用ですか。

（d）お宅の電話番号のほうをお教え願います。あとで健にお伝えしますから。

これらの「完全な文」は外国人学習者にとって文の意味がとてもはっきりとなっているが、しかし、日本人は決してそういうふうに言わない。つまり日本人にとっては分らないはずがないのである。

例（2）〔スーパーで、おつりが足りない場合〕

客：すみません。おつりは。

店員：あ、そうですか。ご免なさい。すみませんでした。〔新にお
つりを渡す〕

「おつりは」まで言い切って これ以上言わない。つまりお客さん自分も言いにくいし、言わなくても相手（店員）が分ってくれると信じるわけである。

さらに次の例を見よう。

例（3）〔水族館で山椒魚を見ている、互いに知らないAとB〕

A：おもしろいですね。これはどういう魚ですか。

B：まあ、動物ですけど。

例（4）

A：車は便利ですね。免許をとっておられますか。

B：ええ、一応とっていますけど。

このように話しことばの中にはあとを表現せず、言いさしのままで柔らかな言い切りを表わす言い方が沢山ある。外国人学習者はそれが非常に苦手である。

確かに日本人は話しことばの省略表現を最大限度に発揮している。伝達の世界では言葉はいつまでも思想より遅れている。思想の伝達は言葉によるものであるが、言葉だけでは、またうまく行かない。まして言葉の量的な累積よりも質的な簡略のほうが望ましい。人間は伝達へ無制限な希望をもっている。しかし、それに対して人間の言葉など精神的なパワーが有限的なものである。この無限性と有限性とは矛盾している。矛盾した結果、経済的な言語行動が生じるわけである。

第二節　あいまいな表現

ある留学生Gさんの経験談であるが、「今日、飲みに出ますが一緒に行きませんか」と誘われて、「行きません」と言って断わった。日本人の女子学生が「Gさん、そんな言い方はちょっとまずいですよ」と注意してくれた。何と言ったらいいかをアドバイスをした。それは「今日はちょっと、ね」と、教えてくれた。「それだけで意味が通じるのか」と聞いて、「ちゃんと通じるよ」と言った。このGさんは研究室の中で、「Gさんは何でもはっきり言いますね」、「好き嫌いが多いですね」「わがままですね」などと、よく言われたそうである。

日本語の暮らしの中の言葉においては、はっきり言わなくてもいい、はっきり言ったら気まずくなる場合がかなり多い。

一番典型的な例が明治維新時代の西郷隆盛と勝海舟の対談である。そのとき、二人は何もしゃべらずに目と目を合わせて、分かった――もしここで戦争したら外国の植民地になるから、そんなことになっては日本が大変だ。将軍は政治力を天皇に渡そうと、決めたということである。

自分の感情を素直に表現しようとしないところに価値があると思われるようである。次の例も同様である。

例（4）

A：明日、来てくれる？

B：明日はちょっと……。

大体の場合はこの「ちょっと」が来たら、相手（A）はすぐ反応を示すと予測される。しかし、相手は外人である場合、その反応はおそいか、全然ないことがよくある。その場合はBはしきりにうなずいて相手の反応を期待する。Aが言語生活に慣れた人なら、この対話は続いていくだろう——

A：あ、そうですか。それじゃ、またお願いします。
B：はい、すみません。（後略）

上の例の「ちょっと」ということばはポイントで、それをつかめなければコミュニケーションが滑らかに行われていかなくなる。

このような柔かな言葉づかいは日本以外の漢字文化圏の人間にとって多かれ少なかれ分るが、西洋人にはなかなか納得できないようである。しかし、実際このような経済的な言葉づかいは言葉自身よりも心の通じあいを信じることから生まれたもので、日本語の言語生活には欠かせないものとされている。

第三節　中性的な表現

世界で生産されるハイテク製品に占める日本製品の割合はビデオカメラ100%弱、ファクシミリ95%、複写機90%、VTR80%、ということである（注④）。日本製品が海外で人気があるのは事実である。品質がいいからとか、使いやすいからとか、外観がきれいだからとか、いずれにせよ、体積が小さくてこぎれいなのは確かなことである。「われわれ日本人は物を作るのが下手だが物を小さくするのが上手だ」などよく耳にへっている。

言語行動において言うと、僅かな言葉にもなるべく多くのコミュニケーションを載せることである。

数多くの感動詞の中には「へえ」ということばがあるが、この「へえ」ほど把握しにくい感動詞はない。いくつかの例を見よう。

例(5)
A：伸子ちゃんてもうキューイ的に食いしんぼでサ、昨はなんか「モーツァルト」でケーキを三コ食べたあとで、パフェも食べたという。
B：へえ。（驚き）

例(6)
A：あの人はうそ八百だよ。
B：へえ。（ただの反応。賛成でも反対でもない）

例(7)
A：つまらないことのため、あの人にさんざんに怒られた。
B：へえ。（驚き、同情、しかし、自分の態度をあいまいにする）

上の例で分かるように話題に第三者の話が出ると、話は行きづまりになってしまう。特にその第三者に傷をつけたり迷惑をかけたり自分の利益にかかわったりする場合は素顔で聞いている態度をとるのが難である。人間関係を重要視される日本では、陰口、悪口、うわさ、評価などに非常に敏感なのである。

「へえ」はあいまいな言葉であるが、「はい」、「そのとおりだ」、「そうですか」、「なるほど」と同じく、あいづちの一つである。

第二章　自我介入を避ける表現

第一節　間接表現

水谷修先生は「日本語の実態」という本にこう書かれている。

「日本人は事実を正確に適切に表現したり説明する習慣をもっていないなどと言われるのである。これは確かに当たっているように思われる（注⑤）。

しかし、日本語の話しことばに接すると、「らしい」（推定）、「そうだ」（伝聞）、「みたいだ」（様態）などの助動詞や、「～ということだ」、「～って」のような引用などの表現が意外に多い。つまり、物事を実際のままに伝達すべきだ、と日本人は思っているのである。だから事実をのままに伝達しようとするわけなのである。

例(8)　〔同じ話題のコミュニケーションはAからBへ、BからCへ、というふうに伝達されていく。最後にCからAへ、確認をかけられる。〕

A：私は今年4月から工学部に変わります。
B：そうですか。

B：Aさんは今年4月から工学部に変わるそうです。
C：ほんと？

A：わたしは4月から仕事が工学部に変わることになりました。
C：そうらしいですね。

例(9)　〔AとBは電話でお話をしている。CはAと一緒にいる。〕
A：日時はどうなっているのですか。
B：木曜の午後一時からです。
A：ちょっと待って下さい。本人に聞いてみますから。
〔Cに向って〕木曜の午後一時から始まるそうです。いいですか。
C：はい。いいですよ。丁度あいていますから。
A：〔電話で〕はい。もしもし。いいそうです。　（後略）

例(10)
A：Bさんはまだ一人ですか。
B：いいえ、わたし、もう結婚しているよ。
A：〔Cに向かって〕Cさん、もう結婚したんだって。
C：へえ、ほんとう？年はいくつですか。　（後略）

日本人は自然を愛するということをよく耳にしている。確かにそう思われる。庭園を例にすると、僅かな庭でも山を作り、川を作り、つまり、自然を作る。それはほんとうの自然でないにもかかわらず、それは自然だ、と日本人は思っている。

言葉の場合も同様である。場合によっては、この「らしい」、「そうだ」などは外国人学習者にまわりくどい思いをさせるものとして、なくてもいい、ないほうがいいものであるように思われる。

確かに中国語や英語などの場合は特別に「伝聞」、「言い伝え」を

強調しない限り、このような言い方は使わない。

第二節「～から」「～ので」表現

例(11)
学生：先生、明日、用事がありますから学校を休んでもいいでしょうか。

例(12)
A：あのー、ちょっとすみません、福尾はどちらでしょうか。
B：すみません、地元の人じゃないんですから。

例(11)も(12)も正しい文で、何の間違いもない。しかし、言葉づかいに敏感な日本人はそれを次のように訂正するだろう。

例(11')
学生：先生、明日、用事がありますんで学校を休んでいいでしょうか。

例(12')
A：あのー、ちょっとすみません、福尾はどちらでしょうか。
B：すみません、地元の人間じゃないんですので……。

例(11)の「から」は強い意志を表わす言葉で、「用事があるから学校を休んでも当たり前のことだ」ということになるおそれがある。学生は先生に言うものではない。

例(12)と(12')とを比べてみよう。「から」も「ので」も原因・理由を表わす接助詞であるが、「から」は原因・理由を主観的に表わすに対して、「ので」はそれを客観的に述べる。相手に道を教える能力のないことを納得してもらうには「ので」が一番適しいと言えよう。このような「人間不在」の言い方はもっとも無難である。「から」だと、「教えられるわけじゃないんだ」、「教えられないのが当然だよ」、「どから、分らないんだ」などと、想像される。しかし、「ので」は決して人にそういうひどい印象を与えていない。

要するに、原因、理由、言い分け、自己主張などの言い方は望ましいものではないのである。

第三節 婉曲な表現

例(13)
イ．食べ物なんか、ほとんどないと言ってよかろう。
ロ．どうも日本人ほど非宗教的な人間はいないのじゃないかというふうに思うのであります。
ハ．そういう、失礼と思われる仕方を避けたほうがいいかも知れません。
ニ．それよりこの方がいいじゃないでしょうか、という感じですね。
ホ．よく分りませんけど、そう言われたら、そうでしょう。
ヘ．すみません、ちょっと分りませんけど。
ト．そうとも言えそうです。
チ．そういうふうに言えよう。

以上のように、話しことばだけでなく、科学を論ずる文章にもよくこういう曖昧さや推測というものが立ち入る。

「xはyである」とすべきところを「xはyであろう」、「xはyではないかと思う」、「xはyであると言ってよさそうである」、「xはyであると言えそうである」などとする。

日本語文のポイントは語尾にある、とよく言われるが、上の例の場合はむしろ語尾を無視してもよかろう。これらは和文中訳の場合苦労するところでもある。学問的な文章でも、どうも著者自身も自信がなさそうなものであるから、説得力が薄らげられてしまう。小説などなら、訳文は流暢さが欠けるため読む楽しさが失われてしまう。

要するに、相手の存在を強く意識して、言葉づかいによって相手に傷をつけたり迷惑をかけたりしないよう、心がける。これは日本語の特徴の一つであろう。

こういう「さしさわりがない表現」が特に相手に忠告するとかの場合によく使われている。忠告でも言葉を柔げて言う工夫をする。

第三章　相手と共にコミュニケーションを作る表現

第一節　あいづち

第三者の立場から談話、或いは対話の場面を見ると、中国人、日本人、アメリカ人、それぞれ違う。一番印象的なのが日本人の談話のしかたである。それはほんとに対話うし対話である。聞き手もうなずいたりあいづちを打ったり、反応を示すのである。アメリカ人や中国人の場合はどうなるだろう。聞き手は静かに聞くだけである。少なくとも日本人ほど頻繁にあいづちをうったりしない。日本人の場合は相手のあいづちがないと、対話が進んでいかなくなる。だから、「そうですね」、「そうですか」、「あ、」、「へえ」、「なるほど」、「ね」などがお話を進めていく潤滑油の役割を果たしている。それがないため、「僕の話はつまらなくて相手の気にへらないかな」、「相手に傷をつけたのか」などと話し手は思うわけである。

第二節　話題の選択

女性同志の間ではよく自分の「彼」（主人かボーイフレンド）のことを話題にする。彼のことをほめないのが原則である。とにかく、あまりいい言葉を使わない。しかし話の終わりの部分に、「でもあの人はいい面もあるよ」とか、「でもね、やさしい人よ」というふうに何気なく軽く言っておく。

この僅かなことばは実は全部話の中で一番大切な部分である。話のポイントがここにある。もし誰かが最初から「ほんとうに親切な人よ」などと言ったら、ばかにされる。と同時に話題が行きづまりになってしまう。

言語は法において、感情を逆に表わす一つの例である。

映画やテレビドラマなどで、次のような場面がよくある。

彼のことが好きなのに、「いやだ、いやだ」と言う。愛情を表わすには冷たい顔をしている。熱烈に「愛している！」というのが西洋の影響とされている。日本人は「言わぬが花」と言って言葉以外のものを信じているからだろう。

第三節　共同の経験による伝達

あいさつやスピーチなどは日本語ほど決まった言い方の多いものはない。

あいさつでは、「おはよう」から「お休み」まで、スピーチでは結婚披露宴祝辞が葬式の弔辞までどれも決まった表現が多い。本屋さんには「スピーチ実例集」や「手紙はがき100例」など沢山ある。よく売れるようである。これらの言葉や表現は既に認められている。再びこれらを言ったり聞いたりすることによって自分たちが日本人であることを再確認するように思われる。

同じことに「コソアド」語系の言葉がよく使われている。これらは共同経験や未知などに境界を表わすので人間関係の親疎程度が明らかにされる。また、同じ経験(「ア」の場合)をもっているため、その成分を省略したりする場合もよくある。

結章

日本に来き学問的な場合にも日常的な場合にも「国際化」、「国際交流」、「国際親善」、「国際人」などの言葉がよく耳に入っている。とくに国際都市としてよく知られている広島ではなおさらである。経済大国の日本は確かに国際交流に力を尽しているような点がする。

どこの国の言葉も文化を負う。日本語においても例外ない。「あいうえお」を、さらに「てにをは」を覚えただけでは間に合わない。ことばのうらには文化がある。その文化を了解しなければその言葉を把握することもできない。

よく留学生が日本で壁にぶつかるというような文句を言うのを耳にする。それに対して日本人の学生は外国人留学生がものを言う場合、何でもはっきり言うことに慣はすると言っている。さし障りのない言い方をしてほしいと言っている。いわゆる壁とは文化なのである。言葉の文化的な背景を了解しなかったら相手の気持を誤解するものである。従って完全なコミュニケーションには到達できない。

それで、暮らしのなかでよく使われる言葉だからといってもよく考えてみたら、そのうらにはいろいろとある。国が違う人びとの間の交流はまず言葉、それから文化、という難関をやぶって始めなければならない。こうして互いに理解することができるようになる。

こう考えてこのレポートを書いた。

1989. 9.

注釈：① 佐藤喜代治編「国語学研究事典」
② 水谷修著「日本語の生態 ― 内の文化を支える話しことば」創拓社 昭和54年7月 PP.4
③ 同上 P12
④「朝日新聞」 1989. 4. 17.
⑤ 水谷修「日本語の生態 ― 内の文化を支える話しことば」創拓社 昭和54年7月 PP.88

(完)